

# 幼児教育及び生活科における身近な小型動物飼育を 通して育む生命尊重の態度の研究

梅田 裕介  
(生活科教育領域)

## I 論文構成

### 序章

#### 第I章 研究の意義

第1節 小学校教育における児童の生き物との  
かかわりの現状及び課題

第2節 幼児教育から生き物とかかわることの  
教育的価値

第3節 飼育活動の対象とその教育的価値

第4節 研究の目的

#### 第II章 幼児及び低学年児童の生命尊重の

態度の定義及び発達段階モデルの構築

第1節 はじめに

第2節 幼児期に育むべき生命尊重の  
態度及び発達段階

第3節 小学校低学年に育むべき生命尊重の  
態度及び発達段階

第4節 まとめ

#### 第III章 思考・気付きに視点を当てた

幼児及び低学年児童の生命観

第1節 思考について

第2節 気付きについて

第3節 まとめ

#### 第IV章 ムッレ教育から見る生命尊重の態度の育成

—日本の生命教育に得られる示唆—

第1節 はじめに

第2節 ムッレ教育から見る生命尊重の態度

第3節 面接調査

第4節 日本の生命教育への示唆

第5節 まとめ

#### 第V章 幼児教育及び生活科における

生命尊重の態度育成の手立て

第1節 はじめに

第2節 生き物とかかわる活動における手立て

第3節 活動の土台となる手立て

第4節 まとめ

### 終章

## II 研究の目的(序章一部及び第I章第1節・第4節)

今日、いじめや自殺、小学生による殺人事件など、生命に関わる子どもの問題行動が社会的な問題となっている。2015年の川崎市中1男子生徒殺害事件が記憶に新しいところであろう。嶋野道弘(2005)は、「今、社会が大きく変化し、子どもを取り巻く環境が変わり、子どもの本能的なとらえ方も変化している。これからの教育において、『生命尊重の心をはぐくむ教育』は、教育課程全体を通して、意図的・計画的・積極的に行う必要がある。…(中略)…それは喫緊の課題である。」

<sup>1)</sup>と述べている。喫緊の課題といえる生命尊重の態度の育成を、教育課程の中で如何に位置づけ、取組んでいくべきなのであろうか。

平成20年小学校学習指導要領解説生活編には、内容(7)において「生命の尊さを実感」させることの大切さについて述べられている<sup>2)</sup>。しかし、2011年に筆者が行った調査からは、小学校入学時から既に生き物に苦手意識をもっている児童、そして生活科を受けても苦手なままである児童の存在が明らかになった。小学校入学時から既に生き物に苦手意識を抱いている場合、生活科において生命の尊さを実感させることは難しいのではないだろうか。そのため、生活科だけでなく、その前段階である幼児教育から、幼児が生き物とかかわり、生命尊重の態度を育む必要があるのではないかと考えた。そこで、平成20年幼稚園教育要領を見ると、領域「環境」の内容(5)に「生命の尊さに気付き」<sup>3)</sup>と記されていた。

以上のことより、生命尊重の態度の育成は、学校教育における重要な今日的課題であると捉えられており、幼児教育及び生活科の双方の教育現場においても、「生命の尊さ」に気付いたり、実感したりすることが求められていることが分かる。しかしながら、幼児教育及び生活科の指導要領等では「生命の尊さ」という同じ文言で括られており、発達段階における明確な定義がなされていない現状である。そこで、これらを踏まえ、本研究では、幼児及び低学年児童に求められる生命尊重の態度を定義し、その定義に基づき、発達段階モデルを作成するとともに、その発達に有益な対象物や手立て、保育者や教師の在り方について示唆を得ようとするものである。

## III 研究の概要

### 1 序章

なぜ今生命尊重の態度育成が求められているかについては前項で触れた。序章ではさらに、児童の生き物とかかわりが希薄化している現状を挙げ、文献調査より、このような現状の下では、子どもが生き物を遠ざけたり汚いものとして認識したりするなど、生き物を否定的に捉えてしまう感情が育まれてしまうことを明らかにした。同時に、中川美穂子(2007)が提唱した動物飼育の効果9点を挙げ<sup>4)</sup>、さらに野々山清・岡田英子(1997)が、低学年児童の「時期にこそ、生き物とかかわり方を工夫させていけば、『生き物を大切

にできる子供』が育つ<sup>5)</sup>と述べていることなど、飼育活動の教育的価値や低学年の時期に生き物とかかわることの有効性について示した。

## 2 第I章(第2節・第3節)

ここでは、幼児教育から生き物とかかわることの必要性や、飼育活動の価値やその対象の選定について述べた。平成17年の中央教育審議会答申では、「幼児期は、知的・感情的な面でも、また人間関係の面でも、日々急速に成長する時期でもあるため、この時期に経験しておかなければならないことを十分に行わせることは、将来、人間として充実した生活を送る上で不可欠である(下線は筆者による)」<sup>6)</sup>とされている。そして、藤崎亜由子・麻生武(2006)は、幼児の生命観の発達について、「多様な感情体験に根ざした具体的かつ直接的な生命の記憶を身にしみ込ませることが大切であり、そのような生命体感を基盤として、『生命とは何か』『生きているとはどういうことか』について客観的かつ体系的な知識(生命概念)の獲得がなされるべきであろう(下線は筆者による)」<sup>7)</sup>と述べている。以上より、幼児期という時期に、生命に対して何らかの気持ちを感じる体験をしておくことこそが、後の幼児の生命概念の獲得に影響を与えられ考えられる。また、文献調査より、道徳性の芽生え、人間形成の基礎、社会性の育ちを育む上でこのような経験が非常に重要な価値をもつことが明らかになった。つまり、生命に触れる体験を幼児期にしておくことは非常に教育的に意義のあることだと考える。また、幼児期の教育は、小学校以降の学びに大きな影響を与えることから、幼児期というこの時期の学びにだけ目を向けるのではなく、この時期の学びを「学習の芽」と捉え、小学校以降の生活や学習へと接続することに留意した教育を行わなければならない。文献調査より、幼児教育の学びとは、活動つまり遊びを中心とした学びであり、知的なことを教えられて学ぶのではなく、子どもが興味や関心、意欲、疑問をもったり、対象とかかわったりする中で育まれていくものだと考えた。そして、この学びは、新井理香(2007)が総合的な知の学びと称しているように<sup>8)</sup>、知識面だけでなく、感情や体の育ちも同時に育まれていくことが、小学校以降の学びの接続を考えた上で重要なのである。以上より、学びの接続を、

幼児教育では、幼児期という時期で求められている生命尊重の態度を、遊びの中で知・心・体の育ちをバランスよく行い、その学びを教師が的確に捉え、次の段階である小学校教育、つまりは生活科へとうまく接続し、さらに発展させることが重要であるとした。

また、幼児教育での「遊び」や生活科における「具体的な活動や体験」及び「直接体験」というキーワー

ドから、生命尊重の態度を育む上で飼育活動が適していると考えた。そして、飼育対象に適したものの条件として、文献調査より、①身近であること、②小さいこと、③ライフサイクルが短く変化が分かりやすいことを挙げた。この条件にあてはまるものとして昆虫の教材性を明らかにしたが、昆虫と一括りにして扱おうと、実際に現場で用いられているカタツムリやダンゴムシなどが含まれず、発達段階に応じた適切な材を見逃してしまうことになり兼ねない。そこで、本研究では、飼育活動の対象を「身近な小型動物」とした。身近な小型動物とは、

子どもにとって身近な場所で見つかり捕まえたりすることが容易にでき、ライフサイクルが短く変化が分かりやすい、昆虫を含むより広い概念に該当する小さな生き物である。

## 3 第II章

ここでは、実際に生命尊重の態度を各発達段階で定義し、その発達段階を明らかにした。文献調査より、生命尊重の態度育成においては、幼児や児童の行動だけを変容させようとするのではなく、かかわる対象、つまり生き物への多様な気づきを子ども自身が自発的に得ていくことが大切だと考えた。そこで、本研究では、

生き物への多様な気づきによって、子どもの生き物に対する行動が変容していくという理論の下で論を進めた。同時に、生命尊重の態度を、

「生き物とのかかわり方(行動)」と「思考・気づき」の2側面で成り立ち、さらに「思考・気づき」は「生き物とのかかわり方」に影響を与える

と本研究では定義し、以降の発達段階モデルの構築等においても、この定義の枠組みの中で論じていくこととした。

幼児教育及び生活科の文献調査により、「自分自身と生き物とのかかわり」や「自分自身と生き物との関係性」で、命の大切さや飼育活動を捉えているものが多数見られた<sup>9)</sup>。また幼児教育では学校教育法により「思考力の芽生え」の育成が、生活科では問題解決のために「思考」<sup>1)</sup>することが大切であるともされており、これらの「思考」は生き物とかかわる上でも重要であると考えられる。これらを踏まえ、以下のようにそれぞれの生命尊重の態度を定義した。

生き物に興味をもったり、かかわったりする中で、生き物に親しみ、「友だち関係」を結ぶことができ、その過程で思考力の芽生えが養われている姿。【幼児期】

生き物を飼育する中で起こる様々な問題を切実な問題意識として捉え、過去の自分の経験や身に付けた知識をもとに思考し、自分の生き物とのかかわり方を見

直し、新たにかかわろうとする、「親子関係」を結ぶことができている姿。【小学校低学年期】

**友だち関係：**幼児期では、生き物と「友だちになる」「親しむ」ことが重要であり、その「友だち」とかかわっていく過程で、生き物は自ずと子どもの「先生」になり、多くのことを教えてくれる。こういった関係性をこのように称する。

**親子関係：**小学校低学年期は、幼児期に育んだ生き物への「親しみ」をもとにして、生き物にかかわり、幼児期に育んだ「思考力の芽生え」を活かして問題解決のために思考していく。過去の経験に基づき思考する過程で、児童は生き物とのかかわり方を見直していく。このように、自分の大切な生き物のために一生懸命にかかわり方を見直そうとする姿からは、まさしく、生き物を自分の「子ども」と捉え、児童には生き物の「親」としての責任感が生まれていると考えられる。こういった関係性をこのように称する。

以上の定義の枠組みで、幼児及び低学年児童の実態調査を行い、生き物とのかかわり方（行動）及び思考・気付きという側面から発達段階を明らかにした。その結果、幼児の生き物とのかかわり方の発達段階として、「A 生き物に興味がない段階」、「B 生き物に興味をもつ段階」、「C 自分本位なかわり方で、生き物とかわる段階」、「D 生き物の気持ちになって、生き物にかかわる段階」の4段階を設定することができた。3歳児ではAやBが多く、5歳児になるにつれてDが多くなるように、その出現頻度にも違いがあると感じられた。しかし、中には3歳児であってもD段階、5歳児であってもA段階というように、発達の個人差があるため、子どもの発達段階を年齢で区切り、十把一絡げに語ることはできない。岸井勇雄（1990）も、発達の個人差や、それに応じて求められる指導の在り方が違うということを述べ、「4歳児の2学期にはこれだけのことができなければ、というような一律一斉の発達課題は存在しないといってもいいだろう。そういう粗雑なことをすれば、効果が上がらないばかりか、大きな弊害を生ずることになるのである」<sup>10</sup>としている。つまり、設定した4段階について、それぞれの段階を「〇歳児における発達課題」として捉えてはならないのである。この4段階は、幼児期という広い枠組みの中で発達していくもの、と捉えることが必要である。仮に4段階のうちの2段階目までしか幼児教育において達成できなかった幼児がいたとしても、一つ一つの段階が、小学校以降の学習につながる重要な意味をもっていると考え、そこまでの発達を次につながる「学習の芽生え」として肯定的に捉え、小学校教育でさらに伸長することに意味があるといえる。

また、低学年児童においても同様にA～D段階の児童の姿が見られたが、D段階において幼児との差異が見られた。低学年児童は幼児と同じD段階であっても、

生き物の気持ちを行動から深く推察したり、切実な問題意識を解決するために思考し、自分の生き物とのかかわり方を見直したりしていると考えられる。そこで、問題解決のための思考により、D段階がD<sup>+</sup>段階、D<sup>+</sup>段階と生き物とのかかわり方は発達していく段階と捉えた。

以上を踏まえ、図1のように発達段階モデルを作成した。

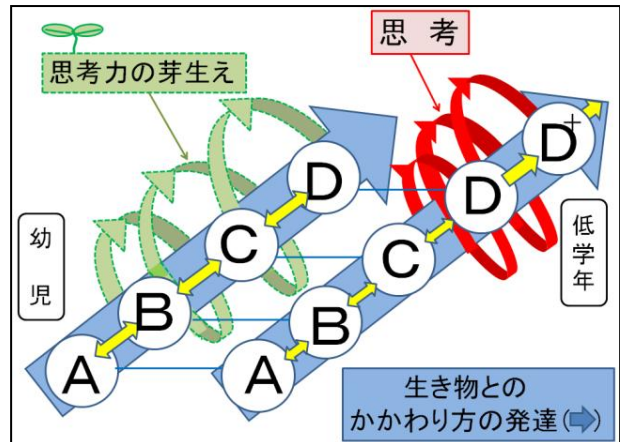


図1 発達段階モデル

図1は、幼児期の学びは、小学校以降に繋がるという学びの連続性を意識している。幼児教育でB段階まで達成した幼児は、生活科においてもB段階から始めればよいのである。それは決して否定的なことではない。個々をしっかりと捉え、各々の成長を大切にすればよいと考えた。

#### 4 第三章

ここでは、第II章で深く触れなかった、生命尊重の態度の一つであり、その発達に大きく関与している「思考・気付き」という内的な側面について明らかにした。

文献調査より思考について、図2のように整理した。幼児期の「思考力の芽生え」では、「不思議だな」「やってみたいな」と思ったことに直感的にかかわり、「無自覚」的な学びを得る。その学びの原動力は、「知識欲や探究心、知的好奇心」である。幼児期はこのような思考力の芽生えの下で、遊びや活動を深めていく時期である。そして、小学校低学年期の「思考力」では、自分なりに目的をもち、その学びをしっかりと自分のものとしていく「自覚」的な学びである。その学びの原動力は、「切実な問題意識」である。小学校低学年期は幼児期の思考力の芽生えを下に、切実な問題意識を解決するために対象にかかわり、価値を見出していく時期である。どちらの時期にも共通していえることは、対象に繰り返しかかわるということ、幼児や低学年児童の思考を促す適切な環境が設定されていること、そこに保育者や教師の意図的な支援があることである。この土台があつてこそ、双方の思考を育むことが期待

される。

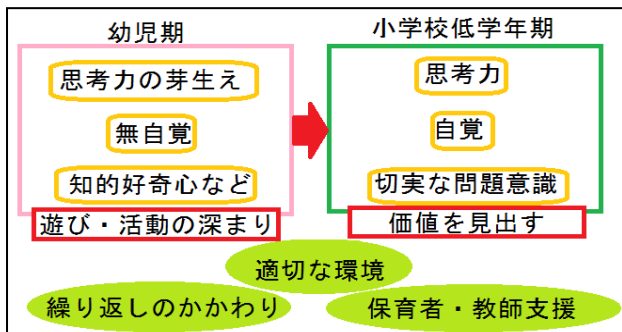


図2 「思考力の芽生え」及び「思考力」の関係

そして、幼児及び低学年児童どちらにおいても、遊びや活動の中で気付きを得ていると捉え、「思考力の芽生え」や「思考力」の下で生き物とかかわっていく過程や結果として、気付きが生まれ、その質が高まっていくとした。

では、生命尊重の態度においては、どのような気付きを得ることが求められているのだろうか。嶋野は、生命の捉えとして、「理性的にとらえることや情緒的にとらえることができる。また、生命の存在を抑制的にとらえることも大切である」<sup>11)</sup>と述べている。鈴木誠・山谷洋樹(2008)の研究によると、生命尊重の態度の背景には生命観があるとし、生命観は「生命とは何かについての根本にある見方、考え方を指し、生物概念

(生物の基本的属性を一つ一つ正確に捉える知識面としての概念)と生命概念(生命の本質的属性を体験などから得られる情意的側面としての概念)を基盤として形成されるもの」と定義できるとしている<sup>12)</sup>。また、山崎高志ら(2006)の研究では、子どものもつ生命イメージを6つの側面に分類している<sup>13)</sup>。これらの文献調査等の結果を踏まえ、図3のように生命観の中でも知的な側面のものを「知的生命観」、情意的な側面のものを「情意的生命観」と定義し、それらへの気付きをそれぞれ「知的生命観への気付き」、「情意的生命観への気付き」として整理した。

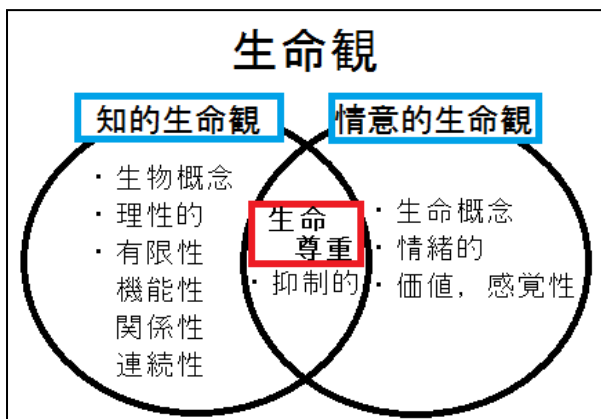


図3 本研究での生命観の捉え

幼児教育や生活科においてはどちらかという「情意的生命観への気付き」が重視されている。知的生命観については、遊びや活動、つまり対象とかかわり情意的生命観が育まれる過程で、子どもの中に自然に育まれることを期待しているのである。しかし、生命尊重の態度とは、図3のように知的生命観と情意的生命観がともに含まれている概念である。子どもが対象とかかわっていく過程で、子どもが何かに興味をもったり、発見したりした時に、「知的生命観への気付き」を促したり高めたりするような、保育者や教師の支援が必要なのである。

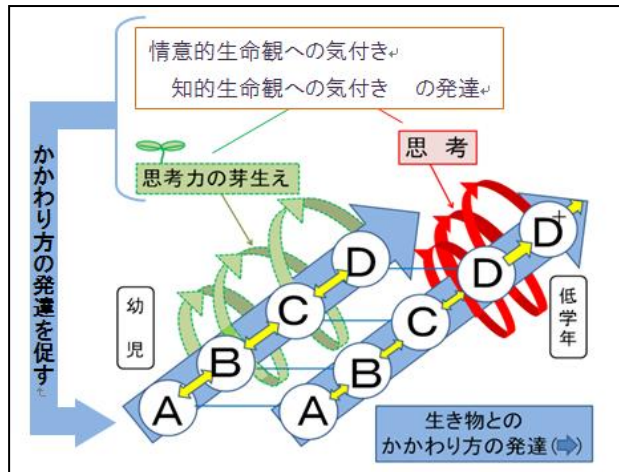


図4 生命尊重の態度の発達最終モデル

以上を踏まえ、図4のように最終モデルを示した。前述のように「情意的生命観への気付き」及び「知的生命観への気付き」は、幼児や低学年児童が思考する過程やその結果生まれるものであり、行動変容に繋がるものである。そのため、「思考力の芽生え」及び「思考力」に付随して、ともに「生き物とかかわり方の発達」(行動)に影響を与えながら、そのまわりを発達していくものと本研究では捉えた。これら全ての発達が、生命尊重の態度の発達なのである。

## 5 第四章

ここでは、近年取り入れられているスウェーデンの教育プログラムの一つである「ムッレ教育」と呼ばれる環境教育プログラムについて検討し、その過程で、日本の教育現場での生命尊重の態度育成の在り方への示唆や、幼小の接続の在り方、保育者や教師の在り方についての示唆を得た。

ムッレ教育は、1歳から小学校高学年まで続く、一貫した教育プログラムである。開発者の一人であるステイーナ・ヨハンソン(1997)は、「急に国民に環境にやさしい行動をしよう、自然や野生の生物を守ろうと呼びかけても、感情がなければ行動につながらないし、続きません。生物への愛情とエコロジーの理解がなければだめなのです(波線は筆者による)」<sup>14)</sup>と述べて



いる。ムッレ教育の目標は、生き物への愛情とエコロジーの理解にある。聞き慣れないエコロジーの理解について特筆すると、ステイーナは「地球上の全生物は依存しあひまた、自然の循環の中で何らかの欠かせない役割をはたしています（下線は筆者による）」<sup>15)</sup>とし、「動物と植物と人間はお互い、隔離されて生きているわけではありません。自然とも隔離していません。お互いに共生し、影響しあい、自分の周囲の環境、例えば空気、水、土壌に影響を与えています。自然を理解するには、自然界を築いている積み木のたった一つのことをいくら詳しく知っていても足りません。その積み木が自然の大きな建築物のどこにあてはまり、どんな機能をしているのかを知らなければなりません」<sup>16)</sup>と述べている。これらより、我々人間を含む生き物とその他自然の全てが関連し合っていることが分かり、エコロジーとはその関連性を理解することであると考えられる。つまりムッレ教育におけるエコロジーとは、難しい概念ではあるものの、「自然の相互関係を理解する」、「それぞれの役割と全体の中での役割を理解する」ということ、そしてその理解にもとづき「自然を大切にする」ということであると考えられる。そして、その際に大切にしなければならないこととして、自然の中の全ての生き物一つ一つには無くてはならない機能があり、互いに影響を与えながら生きている、ということを知ることである（上記下線）。ただ、機能を知るといっても、ミクロな視点で一つの生き物の動きや特徴に終始するのではなく、自然の循環というマクロな視点で、全体の輪の中における機能、その役割を知ることが重要なのである。

ムッレ教育では、エコロジーこそ自然を大切にする意味と捉えられており、かかわりの中で生まれる不思議や疑問を自分なりに考えることが、エコロジーの知識を身につけることであり、学んだ知識に基づいて更に生き物を見たり、考えたりしていく中で、生き物への愛情や責任感、大切にしようとする気持ちが育まれるとしている。自然の循環の理解を通して、自ら自然を大切にできる子どもの姿を大切にしているのである。

さらに本章では、日本におけるムッレ教育の第一人者に対する面接調査を以下のとおり行い、より具体的にムッレ教育の考え方や精神について明らかにした。

- 対象：高見 豊 氏（日本野外生活推進協会 会長）  
 ○日時：2016年1月28日 約3時間程度  
 於 日本野外生活推進協会本部・事務局  
 ○調査方法：半構造化面接法  
 ○特記事項：調査は、主題に沿った回答者の自由な思いを語っていただくために、半構造化面接法で行った。当初予想した質問項目の大半を以下に掲げる。
1. 理念・目標について
  2. 生き物とかかわる活動・経験について
  3. 保育者や教師の在り方について

以上の文献調査や面接調査の結果を受け、以下の6点の示唆を得た。

- (1) 広い視点からの理解
- (2) 活動の在り方
- (3) 飼育活動の認識
- (4) 発達段階に応じた一貫した教育プログラム開発
- (5) 上手く発達できない子どもへの支援
- (6) 保育者や教師の在り方

## 6 第V章

ここでは、今までの研究を踏まえ、幼児教育及び生活科における生命尊重の態度育成において有効な手立ての作成を行った。本研究における生命尊重の態度育成の手立てとは、図4にある、生き物とのかかわり方、思考力の芽生え、思考力をどのように発達させたり、それぞれの気付きをどのように得させ、質を高めたりするかということと捉えることができる。そこで、明らかになった現状や研究結果を踏まえ、筆者が特に重要であると考えた以下の6点を、手立て作成における視点として設定した。

### 視点1 出会い

どのように生き物に興味・関心をもたせ、身近なものであると感じさせるか。

### 視点2 苦手意識

どのように生き物の苦手意識を軽減させ、積極的なかかわりをさせるか。

### 視点3 生き物の気持ち

どのように生き物の気持ちになって、かかわり方を見直し、工夫させるか。

### 視点4 別れ

どのように飼育している生き物と別れるか。

### 視点5 環境

どのような環境を構成することが、子どもの生命尊重の態度育成において大切か。

### 視点6 保育者・教師支援

どのような保育者・教師支援が、子どもの生命尊重の態度育成において大切か。

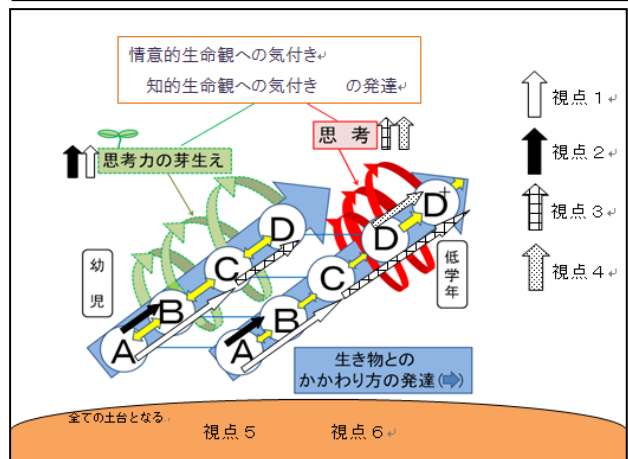


図5 作成した視点と発達段階モデルの対応図

視点1から4は、主に実際に生き物とかかわる活動における視点である。視点5及び6は、視点1から4に包含される事項ではあるかもしれないが、それらの手立てを教育現場にて実施し、子どもの発達を期する上での土台となる事項であるため、敢えて視点を分け図5のように位置付けた。

紙面の都合上それぞれの手立てについては言及しないが、ネイチャーゲームを取り入れた活動や、擬人化や交流活動、言葉掛けの在り方など、多様な角度から手立ての検討及び提案を行った。

最後にまとめとして、生き物を大切に育てることは「できる」けれど、実際に命の大切さは「分からない」子どもや、その逆で、命は大切なものだと「分かっている」けれど、生き物を大切に育てることが「できない」子どもの姿から、「分かる」とことと「できる」とことについて考え、何かを「できる」ようにする手立ての在り方や、その評価の在り方について示した。安部富士男(1989)の人格の発達の捉え方<sup>17)</sup>や、「できる」という事柄を整理した10点の方向目標の定義<sup>18)</sup>から、以下のような示唆を得た。我々教師は、何かを発達させるために手立てを設定し、その実践の下で、発達した結果だけ、あるいは発達した子どもだけに焦点を当て評価しがちであるが、そうあってはならない。時には失敗し、つまずき、考えていく中で、子どもは初めて知識や態度を自分のものとしていくのである。「できない」状態で、試行錯誤し努力している姿も、「できる」状態と同様に、もしくはそれ以上の気持ちで評価していかなければならない。

勿論、「できる」こと、つまり生命尊重の態度が発達していくことが望ましいことには変わりはない。しかし、仮にその時点で何かができるようにならなくても、生活姿勢を保育者や教師がその場でしっかりと捉えてやるのが重要なのである。そうすることで、いつの日かできるようになった際に、人格の発達を大いにともなった、真の「できる子ども」、つまり、真の「生命を大切にできる子ども」が育っていることであろう。

#### IV 今後の課題(終章)

本研究では、幼児教育及び生活科において、それぞれの発達段階で求められる生命尊重の態度を定義し、その発達段階を明らかにした上で、発達に有益な対象物や手立て、保育者や教師の在り方を示してきた。しかしながら、本研究には多くの課題が残されていることはいままでのない。最後にその中から、特筆したい3点について述べることにする。まず一つ目は、評価についてである。生き物とのかかわり方は見てとれるが、どうしても内面の思考や気付きを見取ることは難しい。そこで、それらを評価できるような尺度の作成や、評価の在り方について検討が必要である。二つ目は、思考及び気付きの曖昧さについてである。本研究

では「知的生命観」、「情意的生命観」及びそれらへの気付きと定義し、分析したことはよいものの、どこかまだ表面的であり、具体的には論じられていない現状がある。また、それらの発達や手立てについても本論では述べるに至らなかった。そこで、今後実践を積み重ね、それらの発達をより具体的に解明し、両者の気付きをバランスよく得ていくための手立てや支援についても考えていきたい。三つ目は、本研究で述べた内容は、仮説の域を超えてはいないということである。仮説や手立ては実践における検証をとおして、初めて確固たるものとなる。手立てにおいては取り入れなかった、第IV章のムッレ教育の手法の検証も踏まえ、より多くの実践を行うことで、本研究で明らかにした理論や提案した手立ての有効性を検証し、そこでの成果や課題を踏まえ、常に理論や手立てを更新していきたいと思う。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 嶋野道弘監修『生命尊重の心をはぐくむ「いのち」の実感を深める全教育活動-低学年』、東洋館出版、2005、p.1
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」、日本文教出版、2008、pp.34-35
- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領」、フレーベル館、2008、p.9
- 4) 中川美穂子「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」、『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』4、2007、p.56
- 5) 野々山清・岡田英子「生き物を大切にできる子供を育てる生活科学習」、『愛知教育大学教科教育センター研究報告』21、1997、pp.242-243
- 6) 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について-子どもの最善の利益のために幼児教育を考える-」、2005、第1章第1節
- 7) 藤崎亜由子・麻生武「小動物とロボットをめぐる就学前児のコミュニケーション活動の生態学的研究」、平成14年度～平成17年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、2006、p.118
- 8) 新井理香「幼児期にふさわしい知的発達を促す保育の在り方」、文部科学省『初等教育資料』6月号(No.822)、東洋館出版、2007、p.79
- 9) 例えば、幼児期は虫と一緒に遊び友達になること、まずは動植物に親しむことが重要であると述べられている。また、小学校低学年期は、自分や動植物をもう一度見直し、命あるものとして生き物に切実な問題意識をもってかかわることが大切であるとされている。
  - ・野村芳兵衛『0歳から6歳までの保育』、黎明書房、1973、p.46
  - ・野田敬敏編著『小学校学習指導要領の解説と展開 生活編』、教育出版、2008、p.11
  - ・嶋野道弘「生活科で取り組む生命尊重の心の育成」、前掲書1)、p.54
- 10) 岸井勇雄『幼児教育課程総論』、図書印刷、1990、pp.94-95
- 11) 前掲書1)、p.8
- 12) 鈴木誠・山谷洋樹『『命の大切さ』をどのような視点で捉えればよいのだろうか?-『生命観測定尺度』の開発-』、日本理科教育学会『理科の教育』2008年11月号(No.676)、東洋館出版、2008
- 13) 山崎高志ら「子どもの意識に根ざした道徳指導法の開発・改善～生命尊重を中心に～」、東京学芸大学附属学校研究会『東京学芸大学附属学校研究紀要』33、2006
- 14) 高見幸子訳・監修『自然のなかへ出かけよう Bland stubbar och kottar ムッレの森(スティーナ・ヨハンソン著)』、日本野外生活推進協会、1997、p.8
- 15) 上掲書14)、p.7
- 16) 前掲書14)、p.87
- 17) 安部富士男『感性を育む飼育活動-新幼稚園教育要領をどう読むか-遊び・労働と幼児の発達2』、あゆみ出版、1989、p.61
- 18) 上掲書17)、pp.62-63

#### 【参考とした講演】

- i) 田村学・中川美穂子「学校での動物飼育～心を育む教育…その実践と効果～」、学校動物飼育支援委員会主催セミナー、2012年11月11日